

【編集委員レポート】

京大公共 授業セレクション

本誌編集委員

京都大学公共政策大学院では、公共的な役割を担う高度専門職業人を育成するため、法学・政治学・経済学・経営学を有機的に結合した科目、実務経験者による具体的事例を素材とした科目、公共の世界を原理的・歴史的視点から展望する科目などバラエティに富んだ授業が行われている。どの授業も、それぞれに味わい深く、知的好奇心を刺激され、将来の進路にとっても有益なものばかりである。

本企画は、数ある本大学院の授業のなかでも、特に、本大学院の特色をあらわしていると思われる名授業を編集委員の独断と偏見で選び、広く世間一般に紹介するものである。これらの授業は、まさに京大公共政策大学院における「白熱教室」である。

〈日本政治外交（伊藤之雄教授）〉

授業の濃密さにおいて、伊藤之雄教授の「日

本政治外交」の右に出るものは無い。毎年、

日本の近現代史に関心のある学生が受講する、知る人ぞ知る名授業だ。

この授業では、主に明治から昭和までの元老や天皇等、近代日本

史に登場する人物に着目した書物を毎週読み、学生の作成したレジュメをもとに議論が行われる。伊藤博文や山県有朋、西園寺公望等の元老や明治天皇、昭和天皇がいかにして近代日本を導き、そして後継者に継承していったのかを明らかにすることがこの授業の本旨だ。

授業で学生が課題図書の要約を発表するが、発表を聞きながら小さく頷く伊藤教授の姿が印象的だ。発表の後に学生と教授で議論が行われるが、議論が白熱し、授業終了予定時間後に一時間以上も話が尽きないこともある。

授業で扱う書籍の中でも特筆すべきは、伊藤教授の著作である『伊藤博文』（講談社）だ。六〇ページを超えるこの力作は、授業では三回に分けて扱われる。一次資料を縦横無尽に駆使し、伊藤博文の「剛凌強直（強く厳しく正直）」な人間像を浮き彫りにしたこの著作は、まさに伊藤博文の「正伝」と呼ぶに相応しい。「憲法政

治」（立憲政治）の実現という理念に基づく政治を推し進め、近代日本の礎を築いた伊藤博文の生涯をたどることは、現代の政治を考えるうえでも有益な示唆を与えてくれる。

授業を通じて知る事実は、政治外交史にとどまらない。京大から出町柳駅へ向かう途中にある豪邸が、最後の元老であった西園寺公望の別邸であり、日本政治の舞台に登場したことは、この授業を取らなければ、全く知らないまま卒業していったことであろう。また、現代では威厳ある君主というイメージが一般的である明治天皇が、奥（内庭）では蠟燭の灯を消して女中を困らせて面白がっていたとの記述が伊藤教授の著作の『明治天皇』（ミネルヴァ書房）にある。

伊藤教授が制度ではなく個人に焦点を当てて歴史を研究しているからこそ、現代のイメージとは異なる人物像を浮き上がらせる事が出来るのだろう。

「日本政治外交」は、歴史や外交に興味のある学生にとって、近代国家たる日本がいかにして作られ、また、権力者たちがどんなことに悩みながら日本の歴史を切り拓いていったのかを知ることができる唯一無二の授業だ。伊藤教授の著作を読みながら、国運を賭けた重要な政策決定に際して指導者達の決断までの過程をたどっていくことは、現代の政策決定過程を学ぶ公

共政策大学院の学生にとっても貴重な経験となるはずだ。高校生の時に学んだ日本史が、この十数回の授業中に大きく変化していくこと請け合いである。ちなみに、伊藤之雄教授を伊藤博文の子孫ではないかと勘違いする学生が見られるが、福井出身の伊藤教授は伊藤博文との間に血縁関係はないようだ。しかし、そう思わせる程に、伊藤博文をはじめとする歴史上の人物への伊藤教授の愛着が感じられる授業である。

（文責 野口裕明）

〈CS予算と政策分析（楠壽晴教授）〉

「電子カルテ推進の前に医療・介護分野でもっとやるべきことがあるのでは」

「学力向上のためだけの、三五人学級なのか」

「自動化ゲートを三倍にするというが、なぜ三倍なのかわからない」

各要求施策に対して、厳しい質問が投げかけられる。「CS予算と政策分析」の模擬事業仕分けの一コマだ。人数や時間は実際のものよりコンパクトだが、議論の質は本家に勝るとも劣らない白熱したものであった。

「CS予算と政策分析」は、公共政策の実施に不可欠な予算編成を体験的に学ぶ、ケーススタディの一科目である。実際の予算編成に即した模擬編成を院生が行うというロールプレイ中



模擬事業仕分けの様子

心の授業であるところに本授業の特色がある。冒頭の模擬事業仕分けも、ロールプレイの一環である。授業は、現実の予算編成の動きとリンクして進められ、最終的に本授業オリジナルの予算案が策定される。

本授業を担当する楠壽晴教授は、主計局主査、大臣官房会計課長などを歴任し、予算編成に造詣が深い財務省出身の実務家教員である。その経験から紡ぎだされるコメントは、含蓄に富み、予算編成の何たるかを学生に教えてくれる。

授業では、マクロ編成、ミクロ編成要求側、

ミクロ編成査定側の三チームに分かれ、それぞれチーム内のミーティングや、チーム同士の折衝などを繰り返すこととなる。マクロ編成チームは、国家戦略室の立場として、現実の予算編成にあわせ、予算のマクロフレームを組むとともに、法人税減税や子ども手当の扱いなど、翌年度予算の主要問題を検討する。ミクロ編成要求側は、さらに小チームに分かれ、各自の関心に従い、特定の政策課題について独自の施策を立案し、予算要求を行う。二〇一〇年度の授業では、厚生労働、文部科学、司法・警察の三チームに分かれ、それぞれ「医療・介護分野における電子カルテ標準化事業」、「少人数学級の推進による学力向上」、「訪日旅行促進事業にあわせた入国管理行政の推進」の各施策につき、予算要求を行った。ミクロ編成査定側チームは、財務省主計局の立場として、要求側の各チームを担当し、査定を行う。

楠教授は、折に触れて、「予算のポイント」を指摘する。その一つに、「予算は、性格・人柄・人間性が出る」というものがある。査定側、要求側ともに、予算をめぐる交渉のなかで、その人の性格や能力がにじみ出てくるということである。理詰めで攻める査定担当者もいれば、ねちねちと精神的に追い込む査定担当者もいる。また、はったりをかます要求担当者もいれば、

査定側に易々と屈する要求担当者もいる。予算折衝といっても各人各様であることを、受講生はロールプレイをもって体感するのである。

この授業について、ある受講生は、「苦しい予算折衝を体験して、これから公務員として政策を企画立案していくことが怖くなった。しかし、これを機にもっと勉強しなければならない」と思いを新たにしていた。また、本授業をきっかけに、査定担当を目指そうという志を持った受講生もいる。単なるロールプレイとあなどることはなかれ。本授業は、将来の進路をも左右する泊真の授業なのである。

(文責 長谷川智史)

〈政治哲学古典講読(小野紀明教授)〉

「政治哲学古典講読」では、毎年、ロック『政治二論』第二巻「政治的統治について」(岩波書店)やルソー『社会契約論』(岩波書店)といった政治哲学の古典を講読している。二〇一〇年度は、トクヴィル『アメリカのデモクラシー』第二巻上下(岩波書店)を講読した。本授業は、公共政策に関わる古典のテキストを熟読し、議論することでその現代的意義を探ることを目的としている。受講生は、少人数であることに加えて、大半が二年生であり、本授業を通じて、自らの将来の職務や目標といったものと向き合

い、真剣に考えようとしている。

本授業を担当するのは、小野紀明教授である。小野教授は、西洋政治思想史を専門とし、本大学院の名物授業の一つである「現代規範理論」も担当している。小野教授は、本授業のような一見実務に直結しない授業が公共政策大学院に存在することは、異例だと繰り返し返す。しかしながらその背後には、この授業を通して、目先のことにだけに捉われるのでない長期的で俯瞰的な視野を身に付け、今後私たちが公共的職務に就くにあたった時の道しるべにしてほしいという意図が見える。小野教授は、古典を講読する際の態度として、古典が書かれた時代に即した視点、現代的に捉え直す視点の二つを持つて講読し、歴史的な文脈の中にありながらも現代にも通じる問題や示唆を見つけている必要があるとしている。

一八四〇年に出版された『アメリカのデモクラシー』第二巻では、デモクラシーに基づいた具体的なアメリカの政治制度や法律制度について論じられた第一巻とは趣を異にし、デモクラシーがアメリカ人の感情・意見・習俗に及ぼした影響について検討がなされている。特に、デモクラシー社会と貴族制社会が比較検討され、デモクラシー社会の功罪が鋭く論じられている。授業では、第二巻上下をテーマ毎に区分した

上で、毎週講読が進められていった。具体的には、デモクラシーと宗教との関係、トクヴィルの唯物論的洞察、多数者の専制とその対策などがテーマとして取り上げられた。毎週、担当者が各章の概要について報告を行った上で、論点を提示する。テキストを通じて、大衆社会の病理や「新しい公共」など、トクヴィルの時代と共通して現代日本が抱える課題・問題が提起される。そのような論点について、多様なバックグラウンドを持つ受講生からは様々な意見が出され、活発な議論が行われる。

小野教授は、落ち着いた優しい語り口で、テキストのテーマや受講生が提示する論点について補足やコメントをする。その豊かな教養に裏打ちされた奥深い指摘に、受講生は皆聞き入り、熟考する。本授業の意義は、単に古典を読むというところにあるのではない。「小野教授とともに」古典を読むというところが本授業の眼目なのだ。受講生は、小野教授とともに古典を読むことで、人間として一皮むけて社会に出ていくことになるのである。

(文責 川井三希子)

〈CS省庁間関係(佐伯英隆特別教授)〉

「CS省庁間関係」という授業は、その平板な名前とは裏腹に中身は甚だスリリングである。



(左から) 佐伯教授、佐々山 APEC 室長、受講生

これは偏に、担当者たる元通産官僚・佐伯英隆教授のなせる業である。

本授業においては、公的機関等の相互作用・連関についての考察を、受講生各人が一話完結型で行う。複数省庁にまたがる政策課題について、受講生が自由にテーマを選ぶ。諫早湾の干拓、鳥インフルエンザ、尖閣諸島問題、消えた高齢者問題等、概ね時事的なテーマが中心となる。約三〇分間は発表の時間で、残り一時間で

佐伯教授と受講生による質疑応答が行われる。

発表者によるプレゼンの三〇分間、佐伯教授は目を閉じて黙っている。ダンディーな面体である事は間違いないが、さはさりながら、パツと見、寝ている様に見えなくもない。しかし、さすがはプロ、受講生の誰よりも早く、鋭い質問を発表者につきつけるのは常に佐伯教授その人である。その度に発表者はデッドロック寸前になる。まるで発表を聞く前から、プレゼン内容が全て頭に入っているかの如き鮮やかな佐伯教授の突っ込み、我々は沈黙せざるを得ないのだ。

一通り論点が挙がったあたりから、百戦錬磨の国士官僚たる佐伯教授が、自身の経歴を基に、当該テーマを一刀両断する。一連の会話等を通じて、その博覧強記ぶり、人脈の広さを窺い知る事ができる。以下、ほんの一例を示す。

佐伯教授は、古今東西の歴史上の人物の格言に明るい。本授業ではアドルフ・ヒトラー、バーナード・ショー、ジョージ・パットン、堺屋太一等の言が引用された。また、我々も名前を知っている通産省の後輩が沢山いる。あの村上世彰氏、太田房江氏も後輩である。因みに、両者の事を「せしやう」、「ふーちゃん」と呼ぶ。名だたる二人をかようなあだ名で呼ぶことができるのは、日本広しといえども、佐伯教授ただ

一人であろう。

また、佐伯教授は他省庁にも顔が利く。授業の一回分を活用し、ゲストスピーカーとして外務省 APEC 室長の佐々山拓也氏を招聘した。佐々山氏からは、昨年の横浜 APEC の舞台裏等について聴かせて頂いた。菅総理は、ホスト国のメンツにかけて、熱心に APEC に向けて勉強を重ねていたそうである。

授業最終日の夜は、受講生と佐伯教授で町に繰り出し飲みに行く。居酒屋にて、「現在社長を務めている企業の設立経緯」などのほか、紙面では語れないような教授自身の裏話を色々聞かせて貰えた。

佐伯教授の話を押聴していると、まるで行政を疑似体験している様な気分になる。個々の事例研究から得る知識もさることながら、佐伯教授自身のキャラクターから時代を生き抜くヒントを得られるのがこの授業の醍醐味である。オイルショック以降の日本の行政の歴史が、佐伯教授の一言一言に集約されているのだ。

(文責 三谷真吾)